

## 「茅ヶ崎海岸の軽石(2)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

海岸の満潮時汀線に打ち上げられたゴミの中には、通常時でも軽石が見つかることは稀ではありません。過去の日本の火山は、海底火山も含めて多くの軽石を噴出し、それが日本各地の海岸に漂着しているからです。

古い軽石…つまり噴出してから相当に時間を経た軽石には以下のような特徴があります。

- ・周縁が摩耗し、丸っぽくなっているものが多い。
- ・大きなものはなく、ほとんどが直径 3cm 以下の小さなものばかりである。
- ・海岸に打ち上げられたものは、漂流中に付着した生物も摩耗して表面に残っていない。
- ・海岸にあるものでも、水に沈むことがある。

軽石(軽岩)も実体は水よりも思い鉦物(たとえば網目状の火山ガラス)ですので、長期間漂流すると、内部の間隙にも海水が入り込み、いずれは海底に堆積します。特に海底火山由来の軽石の場合、海岸に漂着する軽石は、海底に沈む軽石よりも圧倒的に少ないと言えるでしょう。

一方で新しい軽石…つまり噴出してから日が浅い軽石には以下のような特徴があります。

- ・周縁の摩耗が少なく、角ばった形状を保っている。
- ・直径が 10cm を超える大きなものも見つかる。
- ・ほとんどの標本は水に浮く。
- ・漂流中に付着した生物やその痕跡が、摩耗せずに表面に残っている。



茅ヶ崎の海岸で見つけた軽石は、これらの条件を満たしているものが多かったため、つい最近まで海面を漂流していた証拠になります。



特徴的だったのは、「エボシガイ」が多数付着していたことです。沖縄で採取した軽石にも「コケムシ」は付着していましたが、エボシガイは見ませんでした。エボシガイは「貝」の名がありますが、甲殻類の一種で「フジツボ」や「カメノテ」に近い仲間です。通常は海面に浮遊する流木などに付着して生活しています。写真のエボシガイ少し前まで生きていたもので、これは軽石そのものがつい最近まで海面を漂流していた、決定的な証拠になります。



エボシガイの仲間は、海面を漂流する物体がないと生活も生殖活動もできません。通常は流木の他に、空き瓶、ペットボトル、浮きブイなどの表面に付着して生活しています。彼らにとって、軽石は格好の「すみか」なのでしょう。直径 10cm 程度の軽石 1 個に数十個体のエボシガイが付着していました。エボシガイの仲間にとって海底火山の噴火は、繁殖と生育範囲を広げる、またとない機会なのかも知れません。